

歳時 世相篇

⑫

【預言者生誕祭】

聖なるガムランのゆくえ

福岡 正太（ふくおかしょうた）

本館文化資源研究センター

ムハンマドの生誕祭

イスラームの暦で第三月一二日は、ジャワ島でムルダンとよばれる預言者ムハンマドの生誕祭である。イスラームの暦は、月の満ち欠けに基づく太陰暦で、一年は三五四日、約三年に一度のうるう年は三五五日となる。わたしたちが参照している太陽暦よりも一年が短いため、イスラームの祝祭日は毎年少しずつ早まっていく。西暦一九八九年、わたしが初めてチルボンで体験したムルダンは、一〇月一二日だった。二〇年後の今年は三月九日にあたる。

スカテンの由来

インドネシア・ジャワ島西部北海岸の町チルボンに残る三つの王宮のうちの一つカノマン王宮では、この日の五日前から毎日、スカテンとよばれるガムランを演奏する。ガムランは、大小さまざまなコーンのセットや鉄琴類を中心とするアンサンブルである。ジャワ島やバリ島にはさまざまな種類のガムランが存在するが、スカテンはそのなかでも比較的古い歴史をもつ神聖なガムランである。

ジャワ島の本格的なイスラーム化は、

一五世紀末、ジャワ島北岸の町から始まった。これらの地域を拠点とするワリ・ソンゴとよばれる九聖人が、神に授けられた力により人びとを救い、神秘主義的なイスラームを広めたとされる。彼らの力は、今も墓所や聖遺物に残されていると信じられている。九聖人の一人スナン・グヌンジャティは、チルボン王国の創始者であり、彼と代々のチルボンの王族を祀る廟には、今も多くの人びとが訪れて礼拝や祈願をおこなう。

ガが作り、イスラーム布教のために利用した。ドウマック王国に嫁いだスナン・グヌンジャティの娘により、チルボンにもたらされたと言われている。その後、チルボン王家は、カスプハンとカノマンの両家にわかれたが、両者がスカテンをわけ合った。現在、カスプハン王宮のスカテンは、断食明けの大祭に際して演奏されるのに対し、カノマン王宮では、ムルダンに演奏されている。

神聖にして犯すべからず

一九八九年一〇月八日、朝、カノマン



カノマン王宮におけるスカテン演奏

王宮のスカテンは一年ぶりに王宮の蔵から運び出され、水で清められた。スカテンを清めた水は、水田にたらすと豊作をもたらしたり、飲むとさまざまな病が治ると信じられている。そのため、スカテンの清めが終わると、人びとは争ってこの水を求める。スカテンは、また、権威と力の源泉として、王にとっても大切なものである。最初の演奏の開始には必ず王自らが立ち会うことになっている。

わたしは、その演奏をビデオに収めようと思ひ、事前に許可を願ったが、許されなかった。スカテンは、聖なるガムランとして、ムルダン以外の時期にその音を響かせてはならない。録音や録画をすれば、再生するたびにその音が響くことになるというのがその理由だった。わたしは、しかたなく一日七回、それぞれ一時間一〇分ほどの演奏に通いつめ、演奏を聴きながら数字譜でその旋律を書き留めた。

新世代のスカテン

二〇〇八年三月、わたしは再びカノマン王宮のスカテンの演奏を見た。王も代りが替わり、演奏者の顔ぶれもだいぶ変わっていた。だめでもともとと思ひながら、ビデオで演奏を撮影してもよいか尋

ねてみたところ、今回はあっさり撮影が許された。実際に演奏が始まってみるとあちらでもこちらでも、小型のビデオカメラをまわしたり、デジカメや携帯電話で動画撮影をしている若者の姿が目についた。もはや録音や録画を規制することは難しいのだろうか。以前、「聖なるもの」の写真を撮って見たが何も写っていないことがあったとか、「聖なる音楽を録音してみたら何の音も入っていないかった」という話をよく聞いた。日進月歩の現代のテクノロジーは、聖人の力をものごとくつあるのだろうか。

一方、若いスカテン演奏者のリーダーと話していると、彼は代々受け継がれてきた文化的な遺産だから、スカテンを守らなければならないと強調していた。「真正な」イスラームへの回帰を目指す動きは、インドネシアでも知識人を中心に広まりつつある。その立場からは、聖人崇拜は邪道である。神秘主義的な信仰のゆえではなく、歴史的文化的に重要なものだからスカテンを伝えていくのだという理屈の立て方は、こうした動向とも関係しているのだろう。スカテンを清めた水を求めて争う人びとは減っているように見えない。しかし、見えないところで少しずつ、聖人の力への信仰が変化し始めているのかもしれない。